

P61a **HII領域 S106の近赤外線偏光観測**

齋藤 弘雄、田村 元秀、神鳥 亮、中島 康、日下部 展彦 橋本 淳、日下部 展彦(国立天文台)、永山 貴宏、長田 哲也(京都大学)、長島 千恵、佐藤 修二(名古屋大学)、IRSF/SIRPOL チーム

S106は、白鳥座に存在するHII領域(距離:~600 pc)であり、O7-O9型星により励起されていると考えられている(Gehrz et al. 1982)。OB型星を含む若い星団が存在しており、複数の原始星候補天体も存在することから、様々な観測と研究が進められている。我々は、この領域を近赤外線偏光装置SIRPOLを用いて星雲全体の偏光観測を行い、星雲全体の偏光分布を初めて明らかにした。本観測の結果、O7-O9型励起星を中心とし、領域全体に広がる赤外反射星雲と、複数のコンパクトな赤外反射星雲を同定することができた。さらに、約600個の点源の同定を行い、これらの点源の偏光度を決定することが出来た(限界等級:17.7等@Hバンド、シーイング~1.7秒角)。これらの偏光測定から大局的な磁場構造の向きは、120度(位置角)であることがわかったが、その傾向は非常に弱い。また、過去の分子輝線観測の結果との比較から分子雲との境界領域で偏光強度が顕著に強くなっていることも明らかになった。

本講演では、赤外線反射星雲の伴う点源に付いての特徴と星雲全体の偏光強度分布の構造に付いて、分子ガス分布との比較を踏まえ議論する。